

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成15年10月号

平成十五年十月一日発行 第十三巻第十号 通巻第一四七号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 楳円軌道

高橋将夫

灼けてをる砂に潮の満ちてきし

薬玉の紐引きにけり夏袴

だんだんに雲海の底見えてきし

木下闇からんころんと通りたる

斑猫の描ける橢円軌道かな  
やはらかきものを踏みたる素足かな  
はたたがみ海馬しづまりみたりける  
雲の峰へと如意棒が伸びてゆく  
せつかくの沢蟹沢に戻したる  
喜こんでもらひし晒鯨かな  
打水の仕舞ひの水を足元へ

風 鈴

加藤富美子

海のいろ見ている朱夏のきたりけり  
巖頭の揚羽はつしと怒濤かな  
風死すも白一条の波がしら  
藤椅子の凹みに月日知らさるる  
流木が石の貌して灼けてをり  
山に日の沈みをはりぬ祭鱧  
蘆の中青衣の女ひとり立つ  
しろがねの風鈴一人残さるる  
水打ちて夕闇近し松の風  
山椒魚己が姿を知らざりき

特別作品

蟾去りし昼の匂ひのにはたづみ  
天道虫星を数へてとびにけり  
遙かまで闇続くかに蟬の穴  
二階より下りてくる音夏の月  
小さくて小さき蠮螋に夕景色  
烏瓜ぶらりと夢をひろげけり  
桃むくや夜空は水をふふみをり  
篁の間の空より赤とんぼ  
散る濤の微塵あまさぬ月あかり  
しみじみとあり新涼の足の指

# 槐安集

市場基巳

どくだみや雨になりてもゆくつもり  
青梅の旬に讃岐へ来てくれし  
どの面も槐の花の匂ひせり  
しやこえびを口にするさへ師が恋し  
螢見に行こうか焼酎買ひ足そか

水野恒彦

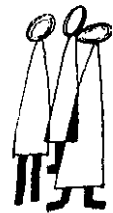
幻日やかたへにダチュラ咲いてをり  
青蜥蜴沙いさいは音もなく崩れ  
一木一草なにもかも夕焼中  
せみしぐれ吾が胸骨を軋ましむ  
晩夏にて何の穴かと跳んでみる

石脇みはる

天牛の飛びたつて顔もどりけり  
立葵伊根の潮風風に入る  
おしくらまんじゅう青田に転びけり  
結論はなかなか出でず雲の峰  
基点は何処蜘蛛糸を吐きつづく

竹内悦子

暁の般若波羅蜜黄蜀葵  
麻三斤の軸吊しあり夏座敷  
暑おすな四万六千日母健在  
一つ咲く藍朝顔の息吹かな  
生命線手首に流れ天の川



木下野生

くろき紐むらさきの紐海開き  
寺ばかりなり寺町の蟬しぐれ  
蟬鳴いてをりその幹に蟬の殻  
かたつむり教会の木の枝の先  
浮いてこい表の門をあけしまま

中島陽華

刀加持受けたりはんざき動き出す  
八朔やトランプのつき廻りくる  
百足虫叩きて乙御前に寝息かな  
パン釜の火入れ式なる晩夏かな  
三毛猫のふと消え烏瓜の花

延広禎一

鉾立や書肆に解体新書ある  
ウクレレやはんざきの孵化はじまれる  
イヨツ守宮ヤアご主人か玻璃戸越し  
葡萄酒の名はモーツァルト甚平着て  
梅雨鯰の泥吐いてをる祇園かな

栗栖恵通子

片虹と生命線とさしかはす  
姥捨に金雀枝の空流れける  
青月夜棺に潮さしにけり  
末伏の耳立つてをるジンタかな  
盆波や銀の小鉤の並びをる

# 槐市集

天野きく江

かわほりに夜の匂ひを乱さるる  
茄子の花虫の齒形の残りなり  
神の島とは言へり合歡の花  
鳥や鳥糸瓜の花の最中かな  
夏の蝶馬の股間を飛び抜けり

雨村敏子

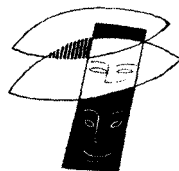
明け方の夏菊畑に寄つてゆく  
夏の土払うてゐたり石の上  
昼閑けし烏柄杓のあたりなり  
揚梅を舌にころがし八潮かな  
着ながして顔が笑うて青芭蕉

秋岡朝子

小ぎれいに独りで暮らし冷奴  
日照草園兎悼みて咲けるなり  
草刈つて木の切り株の残りけり  
かけ声に酔ひの来てゐる神輿かな  
程々がよけれ弾けししやぼん玉

岩月優美子

ひとすじの水音烏瓜の花  
馬洗ふ山の翳りを揺らしつつ  
雲掴めさうに日光黄菅かな  
森の水あつめて川の涼しけれ  
葛餅や海より白き風の来る





# 槐集

高橋将夫選

睡蓮の花葉ゆれつぐ無風かな 枚方 中野 京子

海白し風の一字の墨涼し

甜瓜水と遊んでゐたりけり 福岡 雨村 敏子

海の字の中の母の字遠花火

漆絵を抱へてゆくや夏至の雨

糸吐いて繭になりたる仏かな

蓮池に近づいてくる人のこゑ

青通草の木なりを窓に体温計

観の字を夜に見たりき涼しかり

岩に朱の斑ありけり山女釣 香川 黒田 咲子

梅雨満月蹠に水を感じをり 向日葵のぶつかりさうにぶつからず 京都 竹中 一花

鳴きながら天牛髪を切りたるよ

片瀬波牛頭の神輿を洗ひたる

をんな眉すずしかりけり鯛の皮

夏風や兄のこゑ乗る白皮松

水ぎはでとどまる松葉牡丹かな

ぶぶ漬けの祇園の昼や土用入

蝨斯といふこの大物を食ぶ蜘蛛ぞ

師の影の青葉の中や遍路みち

土壇場にきてしんがりに鬼薊 奈良 瀬川 公馨

虚空蔵求聞持法蟹ぶよぶよす 明石 男波 弘志

うなそこの巨利にゐたる鱒なり

みな橋の袂で居なくなる祭り

飛驒の匠の造り賜ふやとけい草

白桃のやうに明るい屋根の石

もの原につゆ草しげりしげりけり

とめどなく亀の入りたる穴一つ

向日葵や梁山泊に急ぎける

曲り家の馬の睫も盆月夜

# 銀河往來 高橋 将夫

## Ⅱ直叙と配合Ⅱ

前回、映画におけるモニタージュから、俳句における配合にふれた。今回は作句手法としての直叙と配合にふれてみよう。

流れ行く大根の葉の早さかな 高浜 虚子

帝網や六九つの新蓮根 岡井 省二

前者（虚子）が直叙で、流れる大根の葉が直接的、一元的に記述されている。芭蕉のいうところの「黄金を打ち延べたる如き句」である。

後者（省二）は配合の句。帝網（A）と新蓮根（B）の「取り合せ」である。AにBが配合され、Cの世界が成立する。従ってA=Bであれば、新たなCという世界はない。一般にBはAの説明になるのがせきのやまである。逆にAとBが対立したままだと、これまたCの世界はない。AとBは対立し、融合して新たなCの世界を生む。AとBがCを指すという意味で、配合もまた一元化の手法なのである。

後者の句をみてみよう。帝網については「帝釈天の宮殿を荘嚴する玉の網」との註がある。新蓮根の九つの穴は人にある九つの穴（九竅）を暗示する。新蓮根は九つの穴を通じて、帝網の聖なる世界と融合するのである。

俗であって俗でない、聖であって聖でない、明であって明でない、暗であって暗でない。一即一切 一切即一の世界。それが、ここであるCの世界。

糸吐いて繭になりたる仏かな 中野 京子  
繭となった蚕に仏を見る作者の精神の位相に共鳴。糸を吐ききる。そして、自ら吐き出したものにくるまれるのである。美しいシルクの外見の世界ではない。

鳴きながら天牛髪を切りたるよ 黒田 咲子  
髪切虫がその名のように、鋭く鳴きながら、髪を食い切ったという景。なぜか、泣きながら髪を切っている人の姿が浮かんできってしまう。

土壇場に来てしんがり 鬼薊 瀬川 公馨  
なにかしら大変な様子であるが、鬼薊がしんがりを務めてくれているなんぞ、誠にこころ強いかぎり。

梅雨満月 蹠に水を感じをり 雨村 敏子  
「梅雨」に「蹠に水」は、つきすぎと言われそう。しかし、月を見て「蹠に水を感じる」という感性の持ち主は稀有。

向日葵のぶつかりさうにぶつからず 竹中 一花  
向日葵の揺れている景から、花が触れ合いそうな部分を切り取った。向日葵という大きい花が象徴的效果をあげている。

虚空蔵求聞持法 蟹ぶよぶよす 男波 弘志  
虚空蔵求聞持法は、簡単に言うと、一度聞いた忘れなくなる法。この法を悟って、名を空海に改めたといわれる。求聞持法の過酷さには、蟹もぶよぶよになるらしい。（以下略）